ぽちぽち草子

田辺聖子

岩波書店

ぼちぼち草子

田辺聖子

岩波書店

ぼちぼち草子

一九八八年一〇月二七日　第一刷発行©

定価一三〇〇円

著　者　田辺聖子

発行者　緑川亨

発行所　〒101 東京都千代田区一ツ橋二―五―五
株式会社　岩波書店
電話 〇三―二六五―四一一一
振替 東京 六―二六二四〇

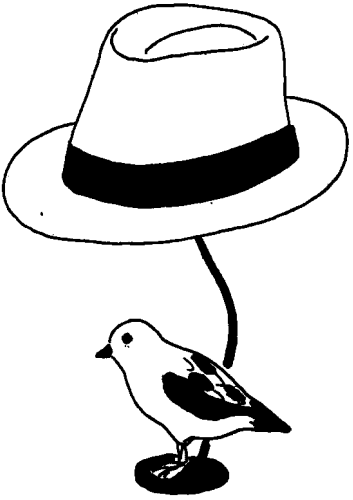
印刷・凸版印刷　製本・牧製本

落丁本・乱丁本はお取替いたします

Printed in Japan
ISBN 4-00-002085-4

目

次



女の定説……1
いま女は何を考えているか……15
理想の夫……29
アッと驚くショッピング……43
男親の教えた歌……59
子連れ男と継母の関係……85
子供の遍歴修行……101
「とんだりはねたり」と老いの花……115
子供地獄……129
何するのよ……143
老いのトバ口……157

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

男と女の違い……171
から　む……185
この頃世間のいやらしいもの……199
タマゴと私……211
社墓について……225
ホッとする……237
別荘の持ちかたは……251
女にしてほしくない仕事……265
あとがき……279

装丁・扉カット＝本くに子

女の定説

時々、私も色紙を頼まれることがあるのだが、これがいやで、苦しまぎれに

「気ばらんと
　　まあ　ぼちぼちに
　　いきまひょか」

と書いたりする。大阪弁ででき上がった川柳まがいのものであるが、(「気ばらんと」というのは、〈気ばらないで〉というような意味の大阪弁である)この、「ぼちぼち」にいく、というのが大阪人は好きで、「どうぞこうぞ」とか「そこそこ」とか、このたぐいの言葉はいっぱいある。道ばたで旧知に会い、

「オイ、どないや、元気でやっとるか」

と聞かれて、

「ま、どうぞこうぞ、やってま」

などという。どうなりこうなり、という意味。儲かってるか、といわれた時は、

「そこそこ、でンなあ」

とか、

「ぼちぼち、ですワ」

というのである。（尤もこの場合の「ぼちぼち」はかなり、儲かっているという感触。「そこそこ」だと、いい線いってるニュアンスがある。ボーダーラインすれすれは、「あきまへんなあ……」と長い嘆息となり、全然赤字、というときは口調も切迫し、短く、断固として「あきまへん！」というのであるが、これが決然として発音するから、「アキマエ！」と聞こえる）

私のぼちぼちは、儲けに関係なく、「バランス良う世渡りしよか」とか、「自分の甲羅に似せた穴、掘ろか」とか、「そう言いつつも、まあ何とかアタックしてみよか」という意味もあるし、「いやいや、手ェ拡げんでもエエ……」とビビる気分も含まれ、そういうあたりの気分を包含して「ぼちぼち」というている。つまり一種の処世方針のようなものであるが、勿論、本気にこんなことを私が考えているわけではないのであって、色紙を出された苦しまぎれに書いたら、巧く、五七五になったというだけの話。私自身はその時任せで生きている。

しかし、自分の書いた言葉に、いつか自分で暗示を受けてしまうということは、あるものである。

何となく、私も「ぼちぼち派」であろうとし、あるような気にもなり、それで、「ぼちぼち草子」というタイトルを思いついたわけである。

ところで、こと女性に関する一般問題でいうと、「ぼちぼち」でやっていたら遅れをとってしまう。女性をめぐる現象の変化流動のはげしさは物凄い。私は昭和三年の生れなので、半世紀にわたる「女」のありかたの転変をつぶさに見ることができて、これは何という面白い時代に生れ合せたのであろうか、と悦に入っている次第であるが。

まず目ざましいのは世のかなりの名論卓説、女性に関する部分から古くなっていく、という発見である。皮肉警句諷刺も女性に関しては、ピント外れが多くなってきた。女性の貌(かお)が捉えにくくなってきたからであろう。

三島由紀夫は、あらゆる文章は形容詞から古くなってゆく、といったが、しかしまだ、三島サンの形容詞は斬新で、腐臭をたてていない。川柳の川上三太郎は「ような川柳」の大家であった。三太郎の形容詞は今なお古びぬ才気が潑剌としている。

〈女の子タオルを絞るやうに拗ね〉

〈基督(キリスト)のやうな顔して鰻ゐる〉

〈アイロンのやうに鴛鴦(おしどり)向きを変へ〉

などは五十年後の今でも笑わされる。感性的な形容詞というのは意外に生命力のあるものである。それに、たとえば「お盆のような月が出た」という形容も、使い方によってはそれなりに活かせるような時代になっていて、筆者の包丁さばき一つにかかっているという、文

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

章に関しては寛容で可能性の多い時代になった。

しかし「女性の周辺」というのは、これはもう何としようか、ごまかしようがない。過去何世紀もの、女性に関する認識や考察、通説定説が引ッくり返ってしまった。片端から定説が古びてゆくのだから、定説に倚りかかって女を論じられない世の中になってしまった。女の部分から、文章や思考が古びてゆくというのは、ここをいうのである。

その定説、というのは、まあさまざまあるが、たとえば、「女に友情はない」ということに、今まではなっていた。女の足を引っぱるのは女だ、といわれつづけ、女もそうかなあ、と思ってしまう。

しかし現代ではもはや、そう思っている若い女は少ない。

人気歌手でもあり作曲家でもあるユーミンこと、松任谷由実サン、この人は雰囲気のある美人で、しかも才女でユーミン語録が面白いところから、女性雑誌の花形のような人であるが、『MORE』'85・10月号で、こんなことをいっている。このユーミン、時に生意気に聞こえる不逞な言辞を弄することもあるが、それも含め、現代女性の代弁をしている部分もあって、そこがまことにキビキビと小気味よい、といったひと。

「女同士の結びつきのほうが強いの。フェミニストなのね。男はね、あっいいなと思ってもすぐ飽きるの。飽きさせないパワーで、この私に匹敵する人はいないんです。

イヤー、女子高生活が深いカゲを落としていますね。なんかこう女同士でいる楽しさを知っちゃってて。で、男がひとりでもそこに入ると役がついちゃう。女性のほうに。たとえば女友達で自然とワーッと集ってるときに、私のダンナが現れると、ま、私は妻になってほかの女性は妻の友人A・Bになっちゃう。そうすると面白くないのよね」

ユーミンには仲のいい旦那様がいて、「今でもダンナに3日くらい恋愛するときってありますよ」というひとである。それでいて、

「女同士の結びつきのほうが強いの」

と覚めた発言をする。これは女と女で協同して一つのことをなしとげるという機会が、多くなったことによって、女の友情が育ちつつあることを思わせる。

女たちは仕事の面白さを知り、それによって「女の友情」の面白さを知ったのである。そうなると、別に仕事を共にしないでも、女と女の間に友情が成り立つときもある。「おぬし、やるな」と女が女を評価し、みとめて友情は生れる。ユーミンの発言は、彼女だけがトビ上がって先端を切っているのではなくて、たぶん老若数多い現代女性の考え方を、広い裾野にしていると思われる。

宝塚歌劇というのを男性が取材すると、女の園の隠微な争いとか、男役にまつわる倒錯趣味とか、そちらの「定説」に落ちこみやすいが、女たちばかりで一つの舞台を創造するとき、

「おぬし、やるな」という評価と信頼が互いになければ、とても三千人の観衆を満足させる舞台は創れない。トップスターは八十人の共演者を首肯させられるだけの実力を持たないと、一ときでもその地位にとどまれない。あの宝塚の舞台は華麗なだけではなく「女の仕事の面白さ」に首までどっぷり漬かった「女同士の結びつき」の楽しさを知った成果なんである。

彼女らがオフのとき、絶えず舞台について侃侃諤諤の議論をたたかわせていることなど、男性取材者は伝えもしない。演出者をまじえない場合でも、彼女らはおのおのそのキャリアによって、語るべきものをいっぱい持っているから、あの場面はこうすべき、この歌はこうあるべきと、議論しつくして倦まない。夜を徹して議論を闘わせる。私はそれを瞥見して、

（まるで二・二六事件前夜の青年将校らみたいやなあ）

と思ったことがあるが、そんな情熱で舞台を創造する、そのさまはユーミンのいう、

「なんかこう女同士でいる楽しさを知っちゃってて」

ということであろう。

ユーミンにしろ、宝塚の生徒にしろ、広く芸能界の女性も、一般の女性も、仕事を持つ女は、子供を持つ持たないの選択を自由にするようになった。これも、男たちの「定説」によれば、

「女は子供を産みたがるハズ、子供を持つことを望むハズ」

であるが、一概にそうともいえない、実に多様な新種女族が次々に生れている。前記のユーミンは三十一だというが、いまのところまだ子供を持っていない。

「子種入る前に、スケジュール入っちゃうんです」

と警抜なジョークを飛ばして、ファンを楽しませている。

子供にまつわる女の「定説」には、女は生れながらに母性愛を持つということになっているが、それも疑わしい。もはや磁石は狂いっぱなしである。小さい子供一人に留守をさせて家を空け、子供を飢え死にさせてしまった母親、スキーに行くために邪魔になった幼児を、福祉施設の門前に無断で放置して(本人はあずけたつもりらしい)、遊びに行った母親、昔ニンゲンの男たちには

「——想像もできない」

女たちが続々と生れている。これは女たちが突然変異で生れたのではなく、昔からこうだったのかもしれない。

何百年か何千年かの「定説」の箍(たが)にはめられて、それらしい女に作られていただけで、かなりの数、生みっぱなし、子供ぎらい、という女がいたのではないかと思われる。(勿論、本能のままに子供をいつくしむ、定説通りの女も多いが)

定説、というより俗説、通説による女の定義は、これはもう、めためたと崩れていってい

る。

女は、自分を裏切った男よりも、相手の女のほうを憎む、といわれたが、現今の女が直接憎悪するのは不実な男のほうなのだ。幽霊になって祟るとすれば、即、男にとりつくのであって、ライバルの女はついでに祟るという具合である。

はじめての男を、女は忘れないというのも、男の好む神話であるが、これがまた、あやふやなこと限りなく、それでも若い女の子は歴史が浅いからまだおぼえているかもしれないが、歴戦幾山河という女たちになると、

「ちょっと待ってよ、アレとアレと、どっちが先だったっけ」

などということになり、特別な感慨はないのである。男にはまことに気の毒だが、女たちが、

「ぶっちゃけた話、ここだけのことだけど——」

というのを聞くと、忙しい年代の時期は、ちょっとしたメイク・ラブさえ、仕事に埋没して完全に忘れることがある、と。

どうかした拍子にフト思い出して、

「あっ、そうそう、そんなことあったっけ」

と思ったりする。最近の出来事でさえ、そうであるから茫々何十年昔のことなんか、

「忙しくって」

おぼえてらんない、という。

いや、女も忙しくなった。仕事を持っている女は、男に目の前をのそのそしていられると、つい、いらいらして、

「そこ、どいてよッ！」

とどなってしまうのである。

「待つ」のが女の本性だというのが「定説」であった。待ってる女というイメージはかなり根強く、演歌の「女」はたいてい、男を待つのである。

しかし同じ待ちかたにも、現今はちょっと「定説」からずれてきている。

桃井かおりサンという女優さんがいる。

彼女も往々、卓抜な意見をもっていて「かおり語録」などといわれる人であるが、たとえば好きな男がやってくるのを待つとき、彼の好物、ビーフシチューならシチューを、いったん作るけれども、あなたのためにこれを作ったのと誇示するのは、ベタベタして、

「私はきらい。——私なら鍋ごと冷蔵庫へ入れちゃう」

せっかく作ったのを鍋ごとしまいこみ、男が来ると無雑作に、「食べるんなら、冷蔵庫にあるよ。残りものだけど」と煙草の煙を吐きつつ顎をしゃくって言い、立とうともしないの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.